

特 250

168

述生先拙大木鈴 學大谷大 授 教

念概諸的本基の教佛

卷一第書叢道傳書文互相教佛

行發社道傳書文互相教佛



始



特250
168



佛敎相互文書傳道叢書

第一卷

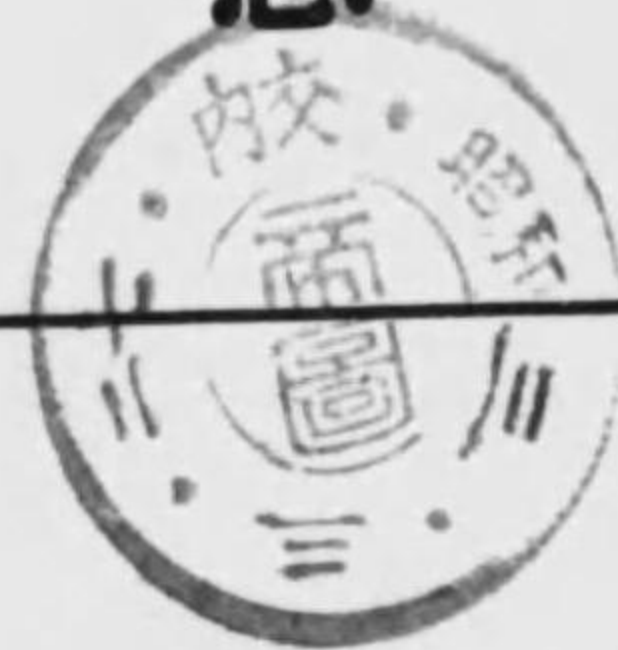
大谷大學
教授

鈴木大拙先生述

佛敎の基本的諸概念

發行所

佛敎相互文書傳道社



念 願

○ 私たちは私の身體を養ふために、毎日かゝらず榮養を攝取して居る。そのありさまは考へれば餓鬼の姿でもある。然るに私たちは心のために何か榮養を攝取してやらうこゝを餓鬼の姿を思はせるほごにまでもがいて居るであらうか。と思ふ時身體のためには忠實であるかの如き私たちは、心のためには本當に不親切であるところの私たちである。

○ 然し私たちは今さうした現實にのみなけいては居られない。なけきの下に私たちを見出したならば、私たちの心のためになんぞかしてやらなくてはならぬ。

○ この念願が私たちをして、この企てをさせて呉れたのである。

私たちのよき友だちは今日はこちらに、あすはあちらに、心のために榮養を攝取して歩いて居る。さうしてそのよりよき半分を私たちにわかち與へて呉れて居る。

わかち與へられたものを、そのまゝに納めて置くことは、たえられない淋しさである。

○

本書が佛教相互文書傳道叢書と名けられたことはそこに意味づけられて居るのである。

○

よき友だちは今大谷大學教授鈴木大拙先生の有益なお話を私たちに與へて呉れた。それ故に今これを皆さんにおわかちすることにした。

○

このお話を受け入れて下さった人は、自分に納めておかないで、たれかにこれをわかち與へ

そのよろこびを共にして頂きたい。かくして連續無窮ならしめて、精神的榮養不良者を減じて行きたい。

○

いつも私たちのためによきお話をたまはる諸先生たちのあたくしお心にふつ、かながら感謝をさぐ。

昭和三年三月一日

相互文書傳道社同人しるす

内 容 一 班

- 一、原始佛教に於ける知的傾向……………(一)
- 一、嚴肅主義——戒律——禪定……………(六)
- 一、情的傾向の發展……………(一〇)
- 一、羅漢と菩薩——小乗と大乘——本生譚及
禁慾主義と大悲大智……………(一八)
- 一、大乘教の理想——佛陀の一生……………(三六)
- 一、一切苦とは何の義か……………(四七)
- 一、智、悲、方便、本願、回向……………(五〇)

佛教の基本的諸概念

大谷大學
教授

鈴木大拙先生述

序 説

私の話の、斯ういふことをはじめてお聴きになるお方には或は多少解り悪いかと思ふことも大分ありますけれども、一寸豫想出来んようなこともありますのであるべく平易になるべく佛教の術語によらないで申上げたいと思ふて居るのであります。

今日は佛教といふものを構成して居る色々な概念がある、その概念の基本的ものを申上げたいのでございます。

一、原始佛教に於ける知的傾向

大體申しますと、佛教と云ふものは餘程知的の傾きを持つて居るのであります。よく比較するのに具合がよいから基督教を出しますが、基督教の情の方に傾いて居るのに比較すると佛教と云ふものは餘程知的になつて居るのでございます。それで初め佛教と云ふものを我々日本人は千年以上もかうなつて來て居るので、空氣を吸うて空氣の存在を知らないようなあんばいに、佛教が我々の生活に染みこんで居る。社會生活と云ふてもよろしいのであります。さういふ中に染みこんで氣が附かん程であるけれども、歐羅巴の學者が研究をしたときに佛教といふものは一種の倫理教會である、佛教の團體と云ふのは一つの道德的考へを基礎にしてその上に組織された團體のやうに考へたものであります。近頃はそれほどには考へられてゐないと思ひますけれども、それでも佛教をはじめて調べた人は、佛教といふものは如何にも學問的な科學的、知的なものであると云ふことに結論してしまふのであります。その知的の傾向が原始佛教と申しまするか、佛教の極

四

始めだと思はれるその方面に知的の傾向が著しく見えるのであります。それは何かと申しますと、佛教と云ふのは、今日傳はつて居る所では、主に二つの文學で傳はつて居るのであります。一方はパールの佛教と云ひ、他の方はサンスクリットの佛教といふやうに二つの文學によつて代表せられの居るのであります。歐羅巴人の研究し始めたのはパールの語で書いたところの佛典であつたので、それがその儘原始佛教であるといふわけではないのでありますけれども、原始佛教の佛がよりよくそれに代表せられて居るといふ所から、パール佛教といふものを原始佛教のやうに考へて來て居るのであります。その所謂パール佛教といふものが餘程知的になつて居るのです。で日本や支那朝鮮等へ傳はつた所のもはサンスクリットの佛教であるので、これは大分後世に發達したものである、佛滅後五百年程の間に發達したところの教であるといふことになつて居るのであります。そこでそのサンスクリットの佛典に發表してあるところの思想といふものは

五

知的は知的であるけれども、原始佛教といふて居るところのものほどには知的でないのであります、それには餘程的傾向といふものがあるのであります。兎に角原始佛教といふものにしても、亦後代の佛教といふものにしても、その二つの表現の形式を具えて居る所の佛教に傳はる、兩方に跨つて共通の修行の方法といふものがあるのであります、それはどういふことかといふと、戒定慧といふ鼎の三足のやうに重んじて、それを佛教の修行の綱目にしたのであります。

一、嚴肅主義——戒律——禪定

佛教は哲學や倫理學說でないのであります。實行と云ふことが大切であります。修行といふことを云ひ出すと、それには戒定慧と云ふものを行はなければならぬと云ふことになるのであります。戒定慧といふことは原始佛教と云はれる所のものにも、また後代に發達した佛教にも兩方に共通して居るのであります。これを三學といふのであります。三學といふ意味は、學といふのは學問の學で

めてなくして、自分の實行の上に學ぶ、これを修行の上に、自分の身の上に、學修する、修得するといふ意味に使ふのであります。それで戒といふのは戒律のこととで、例へば五戒といふ五つの戒もあれば十戒と云ひまして十の戒もある、それから二百五十戒とか五百戒とかいふ、いろいろの箇條書であります。つまり何々すべからずと云ふ禁止の方のことであります。その禁止をしたところが、如何にも道德の項目を掲げたように見えるといふ所に、基督教などでいふ宗教といふものゝ匂ひがないといふ所から、倫理學會のやうに考へたと云ふこともあるのであります。

その次ぎに定といふのは坐禪と云ふことであります。坐禪と云ふことが印度に於ける宗教上の修養の形式になつて居るのであります。これがほかの國で發達したことはないやうですが殊に印度にこの形式が最も發達した、坐禪といふこと結跏趺坐といふことが、天から人間に教へられたところの極めてありがたき修行

の形式であるといふ具合に云はれて居る位なのであります。でこの坐禪、結跏趺坐といふことが傳はつて來てゐる。それが殊に禪宗に於ても結跏趺坐と云ふことがやかましく云はれる。

次に慧と云ふことであります。慧と云ふことは智慧でありますが、智慧と云ふことが、知識のやうに考へられるけれども、佛教で使ふ所の智慧といふ文字は兩方を含んだ字なのであります。普通の知識も含んで居るし、それから又もうひとつ高い所の知識も含んで居るのであります、それで智慧といふものを大體二つに分けて、一つの智慧は學問の上で我々が學ぶ、人から傳えてそしてそれを學修してゆく知識、例へば私共が數學を學ぶにしても、誰れかこゝに數學の先生があるとするればその先生に教はれば二年三年五年六年の間にはその知識を傳へて受け取ることが出来る。それだから或る意味でいふと、三千年前に生れた釋迦にしろ孔子にしろ、數學と云ふ點に於て我々には及ばないと云はれる。しかしなが

らもう一つ修得することの出来る知識がある。これは人から教へられる、他から傳へられると云ふよりも、自分の心の中から自然に開發する所の智でなくてはならない。所謂これを今の言葉で云へば直覺的の知識であるといふてもいゝのであります。佛教で云ふところの戒定慧の慧の中にはこの二つが入つて居るやうであります。悉くがこの自分の心の中から出て來るところの智慧だけではなくして所謂學んで得たところの智慧もやはり含まれて居るようであります。しかしながらいふ迄もなく佛教に於て、宗教に於て重んずる所の智慧は後にいふところの智慧であつて、人から教はつて覺える底の智慧ではない。それは云ふまでもないこととあります。

斯う云ふ點で見ても戒定慧と云ふことが、如何にも戒と云ふところを見れば訓練的である、定と云ふ所を見ればひとつの嚴肅主義と云ひますか、倫理學の上に嚴肅主義と云ふことがあつて、放逸な放埒な、だらけた生活に反對して孔子儒者

のやうに如何にもキチンと調ふた、禪宗の坊さんなどでも修行の時には頗る嚴肅な態度を示しますがさういふような少しも狂げんと云ふ、すべきことはやる、一歩も假借をしないと云ふ所が嚴肅主義であります。其の戒のところを見たり定の所を見たりすると倫理學でいふ嚴肅主義のやうに思はれる。それから智慧の方面を云ふと、學は、一つの學問的といふか智至上主義、知と云ふものが一番上の主義と云ふような風にも考へられる、さういふところから見ても原始佛教と云ふものを、さきにも申しましたやうに智的であると云ふ風にいふのであります。

一、情的傾向の發展

智的であるといふ風には云ふのでありますけれども、併し乍ら宗教と云ふ以上は、宗教と云ふものは智慧、智だけでは出來ないのであつて、智と云ふものがひとつ情にうつらなければほんとうの力が出て來ない。それをお經に書いてある所では、情といふものは足である、智と云ふものは目である、目があつても足がな

ければ駄目である、足があつても目がなかつたら何處へ行くか分らん。親が子供を愛するにしても情があまりあつて智が足りないといふと、子供がそれがために却つてよくならんといふこともある。親の盲目の愛といふものが、殊に母親の愛と云ふものが幾らかこの智と云ふもので矯めて行かなければならないと云ふこともいふのであります。それはどちらにしても宗教と云ふものには、情と云ふものがなかつたらはたつきが出て來ない。たゞじつと觀法をやるやうな具合に山の中に坐つて居つてそれで済むと云ふことではないのであります、どうしても出てはたらかなくてはならない。はたらくと云ふのはどこにあるかといふと、はたらくのには情がなかつたらはたけけない。誰れが商賣をするといふやうな時でも、何の商賣にしても唯金を儲ければいいと云ふわけではないのであります。やはり商賣をやる人にきくと、情、人情、人を思ひやると云ふことがなかつたら商賣も活きては來んといふことを聞きますが學問と云ふことでもさうだらうと思ふ。學

理の上では斯うなるんだからといふて、情を加えなかつたら人間と云ふものは如何にも索莫たるものだと思ふ。まして人間全體を動かす人間全體のはたらきを純粹ならしめようとするところの宗教と云ふものになつては、どうしても情と云ふものがはたらかなければならない。こゝに後期の佛教、原始佛教ではなくして、パーリの佛教ではなくして、サンスクリットの佛教が盛んになつて来たといふ一つの契機があるのであります。階段といふか、展開が出て来たわけでありませう。これが出て来ると云ふと、佛教と云ふものが今日までも傳はりはしないだらうと思ふ。

佛が菩提樹下で阿耨多羅三藐三菩提を成ぜられたと云ふ時に、これで自分は涅槃に入らうと思はれたけれども、その間に——戲曲的に書いてあるのであります——梵天が出て来て、あなたは既に道を悟られたから、あなた自身はそれでよいかも知れませんが世間は暗い、黒闇を照らすのはあなたの力でなければならな

い、そののみならずあなたの考へ出された、悟得されたところのものも全く世間のものが分らんと云ふこともないだらう、解る人もあるだらうから、さういふ人を救ふためにはどうしても今涅槃に入られては困る、さういはれたのでそれならばと云ふて佛が世の中に出られたと云ふ風に書いてあるのであります。經典にはさう書いてあるが、併し乍ら私の考へに直して云ふと、そこに人間と云ふものほんとうのはたらきが出来るのである。人間と云ふものは自分だけがいと云ふだけでなくして、自分と云ふことが、他があると云ふことで出来て居るのだから自分勝手の考へと云ふことが出来ない、自分と云ふことはもう既にそこに他と云ふことが含まれて居る、社会と云ふことが含まれて居る。他と云ふことも社会と云ふことも同じことでありませう。佛教で社会と云ふのは人間だけでなくして動物にしても植物にしても無情の大地天界も含まるのであります。それを法界とも云ふのであります。併し乍ら今の言葉で云へば社会、佛教では法界と云ふことを考

へて居るのであります。その法界と云ふことが背後になつて居つてそこに自分と云ふものが現はれて来るのだから、自分と云ふものを離してしまへばその自分は死んでしまつた自分であるのであります。自分と云ふものはたつき得るのはその背後に法界と云ふものが自分をたつき得るのを許さず、或る意味で云へば綱を引つ張つて居ると云ふてもよい位になるのであります。それだから初め佛が大悟の境界に入られた時に、自分のはたつきだけ気が附いたのでありますけれども、さうではなくて、自分だけではないのであるといふことに気がつかれて、そこで社會へ出なければならぬ、斯ういふことになつたのだらうと思ひます。それを梵天が勸めて、そんなら出ようかと云はれたと云ふ風な表現をとつて居るのだと思ふ。さうでない、すべて物と云ふものは、芝居がゝりと云ふては悪いけれども、さういふ道具立を揃へないといふと文學として面白くない。それでさういふ風に叙述した、又さういふ風な叙述の體裁を要求するように我々の心もちがなつて居る

と云ふてもいい。どちらにしてもよいのであります。兎に角社會と云ふ方面に働かなければならぬやうに人間は出来て居る。初めの方を、佛の正覺と云ふものを智と云ふならば二番目の、世の中に現はれる方のものを悲と云ふのであります。こゝに悲と云ふ心が動く、智の所から悲が動いた、智といふのは父であるし悲と云ふのは母であると云ふように云ふこともありますが、兎に角こゝに悲と云ふものがうごいて、さうしてはじめて佛の形體が具はつたと云ふことにしてよからうと思ふ。これを大の字を付けて大智と大悲と云ふものゝ二つがなくてはほんとうの佛のはたつきが出来ん、それで原始佛といふか、パーリ佛と云ふか、その方では、佛の智的方面にのみ心を捉へられて居つて、今梵天が佛にすゝめたあの悲と云ふ所は、その方面に氣の附かんこともなかつたけれども、それが十分には自分の意識にのぼらなかつたがために、悲と云ふ方面、同情と云ふ方面佛の社會性と云ふ方面には大した發達をしなかつたやうであります。大した發

達をしなかつたようであるが、併しながらパーリの佛敎者と云ふものはそのことを心に持つて居つたことはたしかであります。さうでなければそれが後から發達すると云ふ理窟はないのであります。十分に意識してはゐなかつたけれども、心の中に感じて居つたと云ふことは佛の一生と云ふものは、正覺と云ふものを成ぜられてから八十才まで四十數年の間説法して歩かれた、その説法して歩かれたと云ふのは、何のために歩かれたかと云ふことを考へて見ると、哲學者のやうなあんばいに自分の學説を擴げようと云ふ意味ではなかつた。世間の人を救ふと云ふのが目的であつた。それが爲に、普通の入涅槃の繪を見ると沙羅双樹の下で佛が涅槃されて居ると、そこに色々の動物や天人や弟子をはじめ色々なものがやつて行つてみなが悲しみを表して居るところの圖があります。あれは餘程精神化されたところの涅槃の圖であつて、實際のところは侍者であつた阿難と云ふ弟子と、それから附近の僧團に居つた坊さんがやつて來た位のものであつて、淋しい中で

なくなられたのであります。佛がさういふ淋しいなくなられ方をされたのは自分が始終旅から旅へ出て、さうして旅に病んで夢は枯野をかけめぐると云ふ句があります。さういふやうなわけで旅に病んで死なれた、其一生の歴史を見るとき、皆人のためにさうげられた一生であつたのであります。即ち社會的方面に働かれた、智と以ふものだけを自分の心に出されて置かないで悲と云ふこともなければならぬ、悲と云ふことはたつきが一生の間には、口では云はれなかつたかも知れないが御自分の一生の事實の上にさういふことを表現されて居る。説かれたところは四諦とか十二因縁と云ふようなことを説かれたのであります。その説かれた人の一生は悲と云ふもので固まつて居つたのであります。同情と云ふことは社會性と云ふことの肯定であつた。これは餘程氣を附けなければならぬ、氣を附けて見なければならぬのであつて、こゝに原始佛敎と云ふものと、それから後世の佛敎と云ふものゝ分れ目が出て來る。後世の佛敎と云ふものは今大

乗と云ふ名前を附けて居る、大きな乗りものと書いてあります。それから原始佛教と云ふ方を小乗といふ、小さな乗りものと普通に名前を附けて居る。さう云ふ名を附けて居るけれども、佛教と云ふものはもつとひとつであつて、流れに廣し狭し、深さに深し浅しと云ふことはあるかも知れないけれども、しかしながら流れたることに於て同じものでありますから、これを大乘といふ名を附け、小乗と名を付けて、今の宗旨家が睚み合ふやうに、また賤し合ふやうなことは要らぬことと思ふ。併し乍ら發展の道行のあることは事實として否むことは出来ない。この發展の道行があるために佛教に生命があると云ふことになるのでありますから異ふ要目だけを擧げて置かなくてはならないのである。

一、羅漢と菩薩——小乗と大乘——本生譚
及禁慾主義と大悲大智

小乗の方は、原始佛教の理想的人物は羅漢と云ふことであるし、それから後世

に發達したところの、大乘佛教の理想的人物は菩薩と云ふことになつて居るのであります。羅漢と云ふことがひとつの原始佛教の理想人物である。それが段々に發達して來て今度は菩薩と云ふ理想が出て來たと云ふ事になる、そこで菩薩と云ふことと羅漢といふことをこゝに云はなくてはならないのであります。所謂原始佛教即ちパーリの佛教と云ふものを讀んで見ると、そこに羅漢と云ふ字はあるけれども菩薩と云ふ字は殆どないと云つてもいい。菩薩と云ふ字が原始佛教にはどういふ所に用ひられて居るか云ふと、佛の本生譚といふものを云ふ時に出て居るのであります。本生譚と云ふのは、本の生れの譚と云ふことになつて居るのであります。こゝにやはり佛教の一つの根本概念と云ふか、一つといふていいか、何かとあると思ふ。

それは佛と云ふものは一生で佛になつたのではなくして、過去に於て餘程の修行を積んでそして一世より二世、三世、四世、五世と續けて行つて最後に佛と云

ふものを成就されたといふことであるので、一生では出来上らるのである。佛は生れ代り、死に代り、色々人間になつたり、人間どころでない、動物になつたり或は草木になられたと云ふこともあつたかと思ひますが、本生譚と云ふものゝ中に今残つて居るものでは何百とあります。佛は今兔になつて居るとか今鷲鳥になつて居つたとか、今鹿になつて居つたとか、或はどこそこの王様になつて居られたとか、太子になつ居られたとかいふことで色々生れ代り死に代りして居られるさうしてその間に悉く善根功德を積まれて、所謂——六度といふ六度と云ふことも話すと面倒になります。それは略してしまつて、六つの善い事として置きませう——六つの善いことをつとめられてさうして遂に印度に生れられたと云ふときに、今まで蓄積されたところのその徳の力によつて、最高の智慧をひらかれたのであると云ふことになつて居るのであります。これで三世因果と云ふことも大分問題になつて居るのであります。佛敎の意味で云ふと、兔に角人間と云ふも

のは一代で出来て居るのでなくして、過去何代か續いて来て、さうして續いたところの結果が今日の自分を拵へるものであると斯ういふことになるのであります。これがマア本生譚の意味になるのであります。だから卒然と出て来て、さうしてそこでその人が大變な仕事をする、と云ふわけでなしに、所謂川の流れて来る源が深ければ深いほど、遠いければ遠いほどその川の流が深いと云ふことになる、それと同じわけで、人間も深いところの修養が何代かそこに續いて来て居るがために、今日我々も斯ういふものになつて居る。これがまた宗教だけでなく他の意味にしても、社會的に考へて今日我々が今日だけよければいい、今日自分さへ都合がよければいいといふことを考へて、子孫のことは構はんと云ふことではいけない、今日の我々人間と云ふものは、今日限りでなくなるものでなくして、我々と云ふものは子孫によつて、代表せられる、その子孫と云ふものゝ肉體のみならず、精神の上に於ても自分を繰り返してゆく、繰り返すと云ふよりも、

自分を段々深めてゆく、よからしめてゆくのであると云ふ考へによつて、我々が今日だけでなくして、或る意味から云へば子孫のためにはたらかなければならぬ。先祖から今日まで傳はつて来た文明なら文明、文化なら文化と云ふものをなぐせないようにして増して傳へる、例へば金持が百萬圓を親から承けついでものならば、百五十萬圓にして子供に傳へる、その子供はまたその子供に二百萬圓にして傳へる、個人の財産の上で、資本主義の上から云ふてもさうであるが、これを社會的にすると云ふと、今日我々は日本なら日本、もつと擴めて世界なら世界にこれだけの文明、これだけの文化を造りあげたのだからこれを一朝一夕の戦争によつて無暗にほろぼしてしまはないようにつとめなければならぬ。戦争をやめるために文化は幾らか後退してしまふ。これから後戦争は人類を撲滅してしまふことになるだらうと考へて居るのでありますが、科學の發達が益々強くなると機械と云ふものが益々人を殺すに都合のよいものが出来て来る。昔は弓矢で一人

のものを殺して居つたが、今度は何百人何千人を一ぺんに殺してしまふ。昔の戦ではさうたいしたこともなかつたものが、今度は勝つ方面にしても勢力を亡盡してしまふ、負る方は勿論であります、人類互ひに殺し合つて其の結果はどうなるかと云ふと蛆虫だけ太る、これからの戦争は人類を亡ぼすことを意味して居るに違ひないと思ふ。さうして蟲の世界にしてしまふだらうと思ふ。さういふことにして今まで赫灼傳はつて来た價値の文明を亡してしまふと云ふことはまことに情ないことだらうと思ふ、これは餘談に互りますが——それが本生譚の意義であります。たゞこゝに自分だけで出来上るのでない、段々築きあげなければならぬと云ふことは、個人の遺傳の方に於てもこの説が或る意味に於て考へられると思ひます、けれども、それは云はんで置かうと思ひます。

この本生譚は佛の前生にある、前生にあるのはどう云ふ意味であるかと云ふと、いまいふたようなわけであります、その前生のものを佛と云ふよりは菩薩

といふのであります。こゝに菩薩と云ふ字が出て居るのであります。羅漢と云ふものは佛のやうな正覺を成ぜられた、佛と同じく、佛を成ずるものを羅漢と云ふ。佛も自分は佛陀であつて、又羅漢であること云ふことを云はれるが、菩薩であるとは云はれない、菩薩といふものは佛の前生であつて、色々修行をして、つとめられて居る時が菩薩であると云ふことになる、それで原始佛教と云ふものから菩薩と云ふ考へが發達して來る道行は大體分ることだらうと思ふ。原始佛教で小乗教で理想として居つたところの羅漢と云ふものは、自分だけの智慧を磨くと云ふことになる。これではどうも人に及ぼすことが出來ない、佛教も人に及ぼすと云ふことになつたら、これは所謂辟支佛、辟支佛と云ふても説明しなければならぬからやめて、それではひとりよがりのものでなつて、ほんとうに人間としての完全な發達と云ふわけには行かない。人間といふことになれば曩にも申したように、自分と云ふこと、他といふこととの關係から出來て居るわけだから自分だ

けで正覺を成じてはいけない、自分で得たところのものを他に傳へて、さうして愚なものならば愚なものを導くようにしなければならぬ。そこで羅漢の理想といふことはいけない、どうしても菩薩と云ふことにならなければいけない、菩薩といふものは自分のためだけになくして、人の爲めに自分の身を犠牲にしてはたらくものである、さういふ菩薩と云ふものが、羅漢と云ふものゝ思想に代らなければならぬと云ふことになる。さうして佛なら佛と云ふものが前世に菩薩といふものになつて居つて、今世に佛になるように修行をされた、其の修行をされたといふことは、自分のためにするといふことでなく、人のために傳へるようにと云ふことで佛になられたのだから、菩薩と云ふ修行はつまり人のためにすべき修行といふことになる。

それで羅漢と云ふことになれば自分だけでいい、即ち坐禪なら坐禪をするに巖窟の中に引つ込んでやる、或は森の中にじつとして坐禪をして居つてよいけれど

も菩薩と云ふことになつてはその坐禪だけをして居つてはいかん、世間へ出なければならぬ、人のためになることをしなければならぬ、人をも導かなければならぬと云ふことになつてあります。そこで菩薩と云ふこと、思想が益々發達して來た、益々發達して來るとどうなるかといふと、羅漢と云ふようなことは比丘と云ふことをいふ。比丘はどういふ意味になるかと云ふと乞食と云ふことであります。物を貰つて歩くことと云ふことであります。比丘比丘尼と云ふことを云ふが男の乞食、女の乞食であります。乞食と云ふことは今の社會的の意味にいふと大變悪いようでありますけれども、しかし佛の時代にはまア皆物を貰つて歩いたものです。今でも坊さんが托鉢をするに云ふことはさういふことから出て來るんだらうが、自分は修行のために一身を捧げて居るのでありますから經濟なり産業を營む暇がない、さういふものは人から貰はなければならぬ、さうしてあればある、なければないで暮してゆく、それからもうひとつ僧侶と云ふことを云ふ

が、僧侶と云ふことがこれがむしろ佛敎に特殊の言葉だらうと思ひます。比丘の方は佛敎者だけでなくして、古來の印度の人は今でもさうであらうが皆物を貰つて居る。それで皆比丘と云ふてよい。必ずしも佛敎に限ることはない。佛敎に限つたことは僧侶と云ふことが佛敎に限つた字であります。僧と云ふことはサンガと云ふことになつてあります。比丘と云ふのも梵語を其の儘直したのであります。僧伽と書くのがほんとうであります。それが支那へ來て僧侶と云ふ。僧と云ふ字は梵語のサンガの僧と云ふ字であります。侶といふのはどもだちであります。佛敎はもと三人一緒に暮すようになつて居る。坊さんは一人居らん。よく三人以上侶を爲すと云ふことになつて居るのであります。それでありますから支那の字と梵語の僧と云ふ字を二つ合せたものであります。それで僧侶と云ふことになつて居るが、僧と云ふ方が、三人集團を爲して生活をするに云ふことが唯乞食をして歩くと云ふ意味よりも佛敎の意味に叶つて居る。それで僧侶と云ふ方が

よい、比丘と云ふ字の意味から云ふて僧の方がよい。何も昔から云ふて来て居ることを今日急に改めなければならぬと云ふことではなく、唯さういふ意味があると云ふことを申すだけであります。

それで僧伽と云ふことは何人かの者が寄つて、さうして集團の生活をするのであります。ところがこの僧伽と云ふものはどういふ人間かと云ふと、世を捨て、出家をしたと云ふことになるのであります。世間の係累を離れてしまつて特殊な生活をするところの人間である。これではなるほど修行をするには具合がよい、修行をする人にとつては具合はよいけれども、宗教と云ふものが唯モウ特殊の人間と云ふものを救ふと云ふことが目的であるならばそれでもよいが、宗教と云ふものがすべてのものを救はなければならぬ、救はなければ宗教と云ふものにならない、さうしてさういふものでなければ我々の心が安まらん、自分だけよくてはならぬ、と云ふことになつたら僧伽、僧侶の生活はどうしても在家の生活に轉

じて來なければならぬのであります。それで出家の生活と云ふものでなくしてこれが進んで在家の宗教と云ふものにならない、即ち羅漢と云ふような特殊な、出家して僧侶になつて修行してさうして羅漢になる、それもいゝが羅漢だけでは自分だけはそれによいけれども、今の言葉で云ふと特にめぐまれた人ならばまことに結構です。悉く我々はめぐまれてゐないことはないけれども中にはめぐまれないところの人間が幾らでも出て來る。幾らでも出て來ると云ふと自分だけはいゝがそのめぐまれないところのものはそれをどうするか、それはその儘でいゝか。ところが佛がはじめて正覺を成ぜられたところが自分だけではいけない、世間へ出ようと云ふことになつて居る。世間へ出ようと云ふことになつたらば出家の生活でなくしてこゝに在家と云ふものにならなくてはならない。出家と云ふことだけで佛敎は擴がらない。こゝにどうしても佛敎は在家と云ふことに進まなければならぬ。そこで片一方では羅漢と云ふこととの思想と、それが

展開して菩薩と云ふことの考へに進むと同時に、もうひとつの長所は、出家と云ふものから、在家へ移ると云ふことになつたものだらうと思ふのであります。その最も代表的な所のお経は維摩經と云ふのがありますが、維摩經と云ふお経の主人公が誰れであるかと云ふと、俗人であり、在家の人であります。在家の長者であるとかう書いてあります。さういふ方面まで段々に移て来る。今までのお経の主人公が佛であるとか或は羅漢であるとか、いふようなことでなくなつて、今度は在家の、社會的の人間で社會的に普通の生活をやつて居るところの人が主人公になつてさうしてその維摩の説教が、それが却々巧なものであつて羅漢の如き所謂舍利弗とか目連と云ふ人間は羅漢の中に於ても最も立派な人間であるが、殊に舍利弗は智慧第一と云はれて却々やかましいのであります。その舍利弗などいふものすら、大人が小人をあしらふようなあんばいに取扱ふ、それからもう一人、色々の修行をしたところの文殊と云ふものがある。文殊と云ふと佛

教の初の方には出ないで極く後に出て居るのであつて、これが菩薩の大親方になつて居る。文殊と普賢とがこれが菩薩の大取締になつて居るのであります。その大取締になつて居るところの菩薩をも俗人の維摩が却々ゆるさない、さういふようなところがある。殊に在家佛敎と云ふことを維摩經が力説して居るところを見るといふと、佛敎と云ふものが出家宗教でなくて、在家の宗教に移らんとして居るところの様子が明らかにあると思ふ。それから又華嚴經などに於て一番終ひの方は、これは獨立して居るのですが、兎に角華嚴經と云つて居ります。その華嚴經の終ひに善財童子と云ふ人があつて、童子と云ふけれども子供ではない、童子と書いてあるけれども子供といふことではもともとないらしいのであります。善財と云ふと金持の息子のようになつて居るけれどもさうではない。善財童子と云ふのは一人の若者と云ふ風に見たらよいのであります。これが修行に出かける時に五十三の善知識に値ふて、さうして色々の修行上の啓發を受けて來て居ると

云ふことがある。この修行に出て五十三の善知識に値ふと云ふことは、日本では東海道五十三次などと云ふて華嚴經の五十三次にあてゝやつてみたものと思ふが佛教と云ふものが不知不識のうちに我々の日常生活の中に入つて来て居る。其の五十三次で色々な者に出値ふが、其出値ふ中で比丘、出家をしたものもあるけれども、さうでなしに在家の人が却々居る。在家の人が却々居るのみならず女が却々ある。女の哲學者と云ふか、女の宗教者と云ふものが、却々出て来る、これがまた大いに注目すべきことであらうと思ふ。佛教は女を賤しんだ、と云ふよりも東洋一體の空氣として女を一段見下げて来た。社會學の發達の上では女が威張つて男が頭が上らなかつた時があつたが、ところが戦争をしなければならぬ、で力を尊ぶことが中頃から出て来て、男が自分を偉い者にして来たけれども、初めは女の方が偉かつた。東洋一體には男が偉いものになつて居るが、この佛教の起原の時代には却々女でも偉いのが出て来て其の女と云ふのも殊に所謂今で云へば

賤業者と云ふ、藝者と云ふような風の女、日本でも白拍子と云ふものは却々よかつたと云ふことがあります、今は段々墮落したのでありますが、さういふ種類の女が哲學的に宗教的に善財童子を開發して居る、さう云ふ點が佛教で佛がはじめ女を僧團に入れると僧團が亡びてしまふといふことを云はれて居つたが、それは亡びてもよいわけなのであります。ほろびるべきわけがあつて、ほろびるのだからいいのでありますけれども、それは女を悪いと見てほろびるといふわけではなからうと思ふ。それを或る意味に於て考へて見ると正法と云ふものが五百年續いてそして五百年あとに像法、正法に像たやうな、似よりの佛教が起ると云ふことになつて居るが、これはそれで結構だと思ふ。正法と云ふものは特殊な階級に屬して居るところの、所謂羅漢と云ふやうなものになる人の修める法です。出家して、そして特殊な生活をして、特殊なめぐまれた人間がやるのを正法と云ふならば、そいつがほろびてゆくと云ふことは、佛教が或る意味で云ふと擴がつてゆ

くと云ふことでありますから、大いによいのであります。正法の正の字をよいと見て居るから像は似たようになつて居るけれども、正と云ふものを狭い意味に見てゆくと、狭いものが廣くなつて行くのは何も悪いことはなからふと思ふ。それで女を入れると僧團の結束と云ふものがゆるむ、と云ふことは、ゆるむところに却つて意味があるのだ。それで出家宗教が在家の宗教に弘がる、羅漢の佛教が菩薩の佛教に弘まる、男子の佛教が男女共の佛教に擴がつてゆくと云ふことが、餘程佛教の發展の上に於てまさに然るべきことなのであつて、いまはどうも段々末世で衰へてゆくのだと云ふことは、一方ではさういふことも云はれるかも知れないけれども、一方ではさう云はれないこともあると思ふ。さういふところで、私は禁慾主義と云ふようなことも、禁慾主義と云ふことは手段としてはいいのでありますけれども、これも心もちとしてはやつて行かなければならないけれども禁慾と云ふことに佛教の目的があるのでなく、僧團の生活に佛教の目的があるので

なく、或る手段として、或る境地に到達すべき道行としてはいいけれども、併し乍らこれが窮極の目的になるものでない。斯う云ふ風に段々佛教の發展と云ふことが考へられる、さうすると今まで大智と云ふことにとめて居つたものが今度

は大悲と云ふことと相並んで出て來ることになるのであります。ところが茲に於て又教理の發展と云ふか何と云ふか色々の大悲と云ふても目的をもつた大悲ではいかん、慈悲ではいかん、それでマア大の字を附けることになつてあります。目的を持たないところの慈悲でなくてはいかん、斯うすると斯ういふ功德があるからとか、かういふやうな効用があるからと云ふやうな慈悲ではなくして、目的を考へないところの慈悲と云ふものになる。それで大悲と云ふところの大悲はどこから出て來るかと思ふと、それは大智から出て來るのであります。

楞伽經の初めの方に斯ういふことが書いてある。悲と云ふものが智から出る、

智から出るが、その智と云ふものは有無にわたらん智である、有無にわたらん智とはどういふことであるかといふと、關係的のものではない、あれとか、これとか、善とか悪とかいふ關係にとらはれて居る智でない、限定せられないところの智である、その智から自然に湧いて來るところの悲、その慈悲がはたらかなければならない、さうでない、本物でないといふのであります。それを大智大悲と斯う云ふ風に説いて來るのであります、これが今度は佛教の目的と云ふことになるのであります。これが大乘教の理想と云ふことになるのであります。

一、大乘教の理想——佛陀の一生

大乘教の理想と云ふものが、佛が言葉では、今我々がいふやうに言葉ではいふてはゐなかつたけれども、佛の一生と云ふものが大乘教の理想を其の儘に實現して居るものであると、かう解釋して來ることが出来るのであります。

佛教と云ふものは佛の口から出た、其の當時の知識を土臺にした教ではなくて

佛教と云ふものの中には佛の生涯、佛の體驗と云ふものを入れて見て行かなければならない、其佛の體驗と云ふものを我々がどう見ると云ふときに、そこに佛教と云ふものが段々發展してゆくのである、斯う云ふ具合になる。さうすると、大乘教の理想と云ふものは、これは大乘とか小乗とかいふ歴史を御存知であると云ふと今私のいふところも、私のいまいふところ以上にお分りになるだらうと思ひますが、さういふ知識をあなた方に要求しないで私は云ひたいと思ひますが、御存知のお方は無論御存知である。佛の一生と云ふものに對して自分どもがどう云ふ風にそれを見てゆく、と云ふところに大乘教と云ふものの基礎が成立つて居ると思ふのである。さういふわけにして見ると大悲と云ふことが今度は益々表へ現はれて來た。今まで隠れて居つたものが段々に表に現はれて來ると云ふことになる。表に現はれると云ふことはどう云ふ意味かと云ふと、我々がそれを意識することになるのであります。今では意識してゐなかつたこと、知らずにやつて居

つたことが今度は段々に意識して、さうしてそれを自覚してはたらいて来る。これが人間としての特徴であるのであります。人間の特徴と云ふものは知と云ふもので、段々と今まで知らずに居つたところを知るように、意識して行かうと云ふのが我々の知識のはたらしきなのであります。動物などは知らずにやつて居るが、人間は知つてやると云ふことになる、こゝに發達があるのであるが、知つてやると云ふことが宗教的に云ふと、もうひとつ進んで、はじめは知つてやつたと云ふことが今度は知らずにやることに又なつて行かなければならないのであります。泳ぎを覚えるにしても、字を書くにしても、泳ぎを覚える時に、はじめは手は斯ういふ風に動かす、足は斯ういふ風に動かす、身體は斯う云ふ具合に持つて居ると云ふことを一々意識してやるのであります。しかしながらさういふことを意識してやつて居ては水に入つて溺れてしまふに相違ない。併し乍らはじめは意識しないではその方法を修得するわけには行かないから、はじめは意識してやるが

熟練して来ると恰度魚のやうに泳ぐ、水に居つて水を忘れると云ふことになる。馬に乗るにしてもこれと同じようなことが云はれるのであります。最初は馬に乗るのであります。妙所に達すると鞍上に人なし鞍下に馬なしと云ふあんばいになつてしまふ。はじめは知らずに居つたのが段々自覚して来る。さうして今度は無自覚なところへ入る、己れの欲するところに従ふて心の則を越へずと云ふあんばいになる。そこに極めて無意識のはたらしきが出て来る。初めは意識して出て来るのであります。はじめは意識に出て来たものが無意識の境界にはいりこんでしまふと云ふことになる、その時に宗教と云ふものがはたらくのだと思ふ。これは、どの宗教でも極地は私はさう云ふことにならなくてはならないと思ふ。こゝは善いことをして居るんだと云ふ時にもう道徳である、善いことか悪いことかが分らんがやつて居ると云ふ所まで来れば、其の人はほんとうの宗教と云ふものを體得したものであると云ふことを云ひ得る。所謂不知不識底の則に従ふ、知

らないから則に背いて居るかと言ふとさうではなく従うて居るが、その従うて居る所以を知らずと云ふようなあなばいで……。

西洋に十三世紀の頃に、今から六七百年ほど前に有名なエクハルトと云ふ人が居つて、この人は基督教の正統派に属しないのかも知れない、基督教の正統派と云ふわけにはいかんけれども、しかしながらその人が云ふて居るところは印度や、佛教思想に似ようて居るので何時も何かいふと引き合に出した人でありすが、その人の云ふようには、なるほど基督教では神と云ふことを云ふ。神の心に従ふ、自分の意の儘ではいけない、自分の心の通りをするのではない、自分の好きこのみによつて生きるのではなくして、神のみ心のまゝになしたまへと云ふことを云ふのであります。わしのすきなようなことにするのでなくして、神の御意のまゝになしたまへ、斯う云ふのが基督教の宗教的生活の極地だと考へて居るけれども、エクハルトのいふようには、なるほどそれも結構だが、もうひとつすゝ

まなければならぬ。もうひとつ進んで、私は神の御意のまゝにして居るか、自分の心の通りに動いて居るか何も知らずに居る、さういふ所まで来ないと云ふとほんものではない、神、神と云ふことも結構だ、佛佛と云ふことも結構だが、佛と云ふことを云ふて居る以上は、神と云ふことを云ふて居る以上はまだほんものではない。さういふ意識が残つて居つてはいけない。さういふてもはじめは意識と云ふものをするんです。しなければ人間は何も出来ない。がしかしながらその意識するのをもうひとつ超えたと云ふ所まで出て行かなければならぬ。斯う云ふ風に云ふとよからうと思ふのであります……。

そこで意識をしない所の智のはたらき悲のはたらきが出て来なければならぬ。そこで悲と云ふことをもういつべん云ひ換るが、悲と云ふことがどう云ふことになるかと云ふと、さきに申しましたように、自分と云ふものがあるのがどういふわけであるかと云ふと、自分でないものがある、自分以外のものがあるので自分

と云ふものが出来上る、斯うなると云ふと孔子などの云ふやうに、己れを達せんとするには先づ人を達する、むしろが論語を習つたときに人を達する、と云ふのは妙なことだと思ふて居つたが、段々さういふことが分るようになったが、禪宗などにも四弘誓願と云ふことがあります。四弘誓願のうちに衆生無邊誓願度と云ふことがあります。其の次ぎに煩惱無盡誓願断と云ふことが云ふてある。御存知ない方はないだらうが、衆生無邊誓願度、衆生と云ふのは人といふことであります。この世界を先づ救ひたいと云ふのであります。その世界を救ふと云ふことをさきにかけて、さうして煩惱と云ふことは自分の足りない所を今度は足りるやうにしたい、それだからして一番はじめに人を救ふと云ふことをもとにして、さうして其の次ぎに自分を完全にすると云ふことになる。さうするといふと、人の爲めに苦しむといふことになりませうが、修行するといふことがほかの話のやうに考られる。ければもそれをいまいふたやうに自分を意識する、意識の其の本

には何があるといふと、衆生といふことがある、他といふことがある、社会といふことがある、世界といふことがある、天地といふことがあるといふことに考て来ると、さうすると自分といふものは唯上へ出た所から見居ると、はたらいて居る役者のやうにあるけれども、役者をしてはたらかしむるところの舞臺がそこまで出て来なければ自分ばかりはたらくといふことにはいかない。さうすれば自分といふものを仕上るといふことのために、自分をして、自分の存在をして可能ならしめて居る所のものから先づ着手するといふことでなければならぬ。これが悲といふほんとうのはたらしきの原理だと思ふ。

私共昔かういふことをきいたことがある。今はさう云ふことはいはんけれども自己といふことが一番だ、自利することが大事だ、人の爲めに良いことをするのは畢竟自分のために戻つて来るから、と云ふその頃はなるほどさうでもあるかも知らん、と思ふたが何となく物足りない氣がして居つた。自分のために都合のい

ように人の世話をしてやることがないだらうかと云ふ氣がして、何か分らなかつたが段々に色々の本を見たり、自分で氣を付けて居ると云ふと、さうぢやない、やつぱり本來我々には人をすくふてやりたい心があるんです。自分の爲にしたいと云ふ心があると同時に人の爲にしたいと云ふ心があるのです。自分の爲にすると云ふことは決してそれだけでは出来るものでなくして、人のためにすると云ふことがあつて、自分のためにすると云ふことが出来る。それだから同時に行はなければならぬ。自利利他と云ふことをよく佛敎で云ふが、それは兩方で行はなければならぬと云ふことが餘程大事であります。

それでたとへばさういふことの一つの證據として、我々が利他と云ふことが本能的に矢張りあると云ふことの卑近な證據として云へば、これは日本でも西洋でもよく云ふことでありますが、子供が溺れる、或は人が溺れると云ふときにそこに飛び込んで行つて、所謂孟子に書いてあるやうに、弟子穴に陥らんとするや、

人がこれを助けるのに報酬を求めないのでなく、世間の評判がよくなることをもとめるのではない、その通りであります。そこに憐みと云ふことが動いて、悲と云ふ心が動いてするのだと云ふ、これは人を救ふたりすることは表彰すると云ふことになつて居る。ところが斯う云ふ問題が時々起る。救ふと云ふことは善いことだが、救ふた人間がどんな人間かと云ふと、平生は頗る評判のよくない人間である世間に迷惑をかけて仕方のない人間である、ところが危急存亡の時にはたらいた自分の身を挺して進んで溺れるものを助ける、それで表彰するにも、どうも表彰していか悪いかと云ふことがある。あゝいふところを見ても、それはその人が表彰して貰はうとか、人によくいはれようといふことでなしにその人は本能的に動いてやつたのであります。それは誰れもかもやることと思ふ。或は軍人などが金鷄勳章などを貰つたものが、戦争の最中に、我々のような弱蟲でも或は彈丸を物ともせずに進むことがあるかも知れない、さうして幸に生きて還つて勳章を

貫ふが、もつと善いことをやつて居つたかも知れないが貫はずに死んでしまふ人がある。金鷄勳章を貰つて來たものが、新聞にもよく出るでせう何かよくない事をして捕へられるものがある。一時興奮したときには随分やる忠臣蔵でもさうでありませう、義士は惜しい人間であるけれども、またあゝいふ人間は長生して居る間に自分のやつた手柄を汚すようなことがあつては、却つて彼等の一度び得た忠臣である、義士であるといふ名譽を失墜するから、切腹させた方がよいと云ふことを主張するものがあつた、と云ふことでありますがまことに人情を穿つて居ると思ふ。人間と云ふものは悪いことばかり覺えつくだけでない、善い事もよく思ひつくものである。下らんものでも思ひつくか知らんけれどもそれをとめてしまふことがある。まアあると云ふことはたしかにあるんです。これを宗教的に恵まれた人はその心を養ひもつてゆくのであります。その心を養ひ持つて、悲と云ふことがそこからはたらくのである、悲と云ふことが他人を憐む、他と云ふことが

本能的に動くことの哲學的根據、いまいふたやうに自分と云ふものが他と云ふものによつてのみ條件づけられて可能であるのではないかと思ふ。この悲と云ふところから世間を見ると云ふとどうかと云ふと、羅漢と云ふやうなのは間違ひである、自分だけはこれでよい、自分はよく達した、地獄へは行かん、極樂があるならば極樂に行くと云ふことはよいように考へたらよいが、それを悲と云ふ方面から見ると世間には矢張り自分よりも、もつと悪いといふてはいゝかどうかわからんけれども、自分よりも情ない境遇に居るものが随分ある、それをどうする、自分だけはいゝけれども、自分だけは苦しみを脱却したにしても苦しみにとらへられて居るものが澤山ある。すべてのものが苦と云ふことが佛教の立場である。

一、一切苦とは何の義か

すべてのものが苦しんで居る。すべてのものが苦しんで居るのを見て居られない。何か力を出してあれを救ふと云ふことにしなければならん、かうなるのであ

ります。これがさきに申しました菩薩と云ふ理想の人物が佛教に出て来た本である。そこで菩薩はそれでは自分は涅槃に入る、自分の正覺を成ずることはひとつ控えよう、自分がこの世に生れ變つて来よう、自分だけが極樂に行くことをしなさい、自分だけが超然として居ることはしない、自分もやはり世間にとまつてあはれなものを救つてやる、一切苦に沈淪して居るところのものを助けなければならぬ、かう云ふことになるのであります。それを助けるにはどう云ふことが必要であるかと云ふと、自分は何か本生譚にあるようなわけで前世に功徳を積んで来て、今生は恵まれて身體も息災であるし、意志の力も強いし、智慧も十分にある、それで佛教の修行をして一かどの羅漢になつた、羅漢になつたが、なれない人のあるのをばどうする、唯自分がその羅漢になることをやめて、さうしてこの世にさう云ふ弱い人と一緒にして居ると云ふことだけでは何もならぬ。そこに何かひとつ手段と云ふものがなければならぬ、そこで悲と云ふものから方

便と云ふものが出て来るのである。

日本では方便が頗る濫用されて居るけれども、そこに方便と云ふものが出て来たのが、佛教に於ける、大乘佛教と小乗佛教、原始佛教と、後世に發達した佛教と區別の出来ると云ふ點の一つは方便と云ふ考が佛教の基本的概念のひとつである。さきに云ふて来た智と悲それから方便と云ふものが出て来なければならぬ。方便と云ふものがどうしても出て来なければならぬのであります。茲に苦しんで居るものがある。その苦しんで居るものを、こつちから見るとどうしてもひややかな眼で見られないと云ふのであります。あいつは悪いことをしたのだから、悪いことの報いを受けるのはあたりまいではないか、何もさう助けてやる必要はない、助けてもあいつは悪いところへ行つてしまふのだからと云ふことになる、けれども悲のはたらくで見ると云ふとさういふ冷やかな眼で見えて居られない、悪いことをして悪い所へ落ちるのであるけれども何か手がかり

があつたならば、悪いところへ十なら十まで行くのを、ひとつだけでも救ふてやる道がないかと云ふことです。

一、智 悲 方便 本願 回向

この悲の本の力がこれが誓願、願と云ふことになるのであります。願と云ふものになつて、ごうはたらくかと云ふと、自分の願ひ、ごうかしてやりたいと云ふ願が向ふの心の上に加はつて、さうして向ふの心が悪いので固まつて居る中に、ひとつでも善い心が起るやうな可能性が出て來はしないか、それだからこの祈ると云ふことも何もならぬことだ、祈らずとも神は守らん、神は守るであらうが守られるに相違はなからうが、ごうしても祈らずには置けない心もちがある、守らんと云ふのは自分の善いことをもとめると云ふ方面であるが、いまいふて來た方は、人の情ないのを見てごうかして助けてやりたい、助けられるにしても、助けられにしてもそれは構はない、ごうしても助けてやらなければ氣がすまんと

いふことがある、その心がごうしてもすまんと云ふことがある、そこで方便と云ふものが色々出て來る。方便が色々出て來る一つの道はごうかと云ふと、自分が今まで善いことをした、その善いことを百したと云ふならば、百したところの善いものを五つでも十でも二十でもいゝが人にやれんか、自分は百積んだが、自分だけで使はないで幾らか三十なら三十でも二十なら二十でも人に融通してやれんか、そんなことをしても何もならぬ、自分で積んで得たものは自分のものだ、銀行に百圓金を預けて置く、これは勿論自分の名前である。今の科學では自分の名前が人の名前にならない、誤魔化すかごうかするよりほか仕様がな、それを人の名前に書換ると云ふことはごうして可能であるか、可能でない、何か誤魔化しが出て來なければ可能でない、宗教の世界では誤魔化しであらうが誤魔化しでなからうが、裁判所の法理に叶はうが叶ふまいが、自分が斯うしたいと、思ふ心がやられん、そこで何かしたいと云ふ方法が出て來なければならぬ、一に一を加

えて二でなく三にしなければならぬ。そこで宗教と云ふものゝほんとうのはたらきが出て来る。

そこで眞宗などにしても、淨土宗にしても彌陀の本願と云ふことがそこから出て来る。菩薩と云ふものが六度萬行を成就しても、やはりこれが人の身の上に爲めにならなければならぬ、自分だけに止めるものでなくして、人の身にこれが移らなければならぬと云ふような心もちがそれが本願と云ふものになつて、さうして阿彌陀の四十八願が出来ることになつたと思ふ。我々は、阿彌陀に限らない、皆本願を持つて居る、さうして方便と云ふことも持つて居ると思ふ。たゞ我々が、そんなに願うたところで、たゞさう願ふと云ふことは主觀的のことであつて、幾ら、何か知らんが願うて居つても、時節が來なければ達せられないと、同じあんばいに、我々には力が及ばぬ、自然の數に支配されて居るような世界、その社會と云ふものを、自分の主觀的の如何に強い意志があつても、如何に強い激

しい情が動いても、それがために客觀界は動かない、客觀の世界は動かんと、マア斯う世間の人の道理から云へばさうなる。併し乍ら宗教と云ふものがそいつをのりこえたところに成立して居るのであつて、どうしても自分を思ふ心で人を動かさなくてはならないと云ふことになる、さうして宗教では明らかに動き得るんだと私は信じてゐる、そこから方便と云ふものが湧いて來て、さうしてそのものがほかのものに移すことが出来る、かう私は宗教の上では云へる、それを廻向と云ふのであります。自分の持つて居るところのものを、持つて居ない人に移すことになる。だから自分のために功德を積むと云ふことでなく、人のために功德を積むと云ふことになる、自分が積んだところの功德が人の功德になる、斯う云ふことであります。

それで或る意味で云ふと、宗教は損ばかりすることである、世間のことは得をするようにつとめるけれども、宗教は損をするようにする、損をすると云ふこと

は自分に損がするのであつて人に得が行くのである。そんなら斯う云ふ議論も出来る。皆が人の爲めにと云ふことになつたら、それは假定の議論であります。世間の論理と云ふことを本にして皆が損をしたいと云ふ心が動いたら、誰れも得をするものはないのであります。それがほんとうの理想の社會になつてしまつたんだから、佛教はそのときに亡びていゝわけである、佛教と云ふものが苟くも一人の人でも世間にあるときは菩薩は死に代り生き代り出て来る。即ち佛教と云ふものが、そこまで生きて居る、皆損をしようと云ふことになる、皆菩薩になると云ふことになれば、それではじめて目的が達せられたのであるから、そこに佛教の窮極がある、そこに佛教はほろびたのである。亡びたのは即ち佛教が成就したのである。完全に至ると亡びてしまふ、さういふ具合にいふたらどうか知らんと思ふて居るのであります。

さうするといまのところを引きまゝとめて申しますと、智と云ふこと悲と云ふこと、さうして方便と云ふこと、それから本願と云ふこと廻向と云ふこと、斯ういふものは佛教の基本的の概念、まだく云はうと思へばあると思ひますけれども私はこれらが佛教の基本的のものだと思ふて居る。中には無我と云ふようなことを云はれます。小乗佛教にも大乘佛教にも無我無人と云ふことをいふ、人もなければ自分もないと云ふことを云ひますけれども、それは私は哲學的にあまりゆきはしないか、所謂般若の方面になつて来ると人もなければ空と云ふことになる、空と云ふ方面は哲學上の議論としてはそれはいゝでせうが、併し乍ら佛教と云ふて、宗教と云ふものゝ立場から見るときには矢張り智と云ふことや、悲と云ふこと、それから方便本願廻向と云ふやうな、斯う云ふ積極的な考を本にした方がいゝではないか、智と云ふものからなるほど今云ふ無我無人と云ふようなことも出て来るのであります。人空法空と云ふことも云ふ、それはどちらでもいゝが、智と云ふことを主にして居る點はさういふ所へ出たのであるだらうけれども、併

し乍らそこに智と云ふことの範圍に屬し、そしてそれから後は次に屬した、第二次に來るべきものであると見たらどうか知らん。佛教では宗教として積極的なところを立て、さうして行かねばならない。殊に近頃は悲と云ふことを餘程基にして行かなければならないと思ふのであります。今まで智と云ふことに逼して居たのが悲と云ふ考へが出て來て智と云ふこと、相並んで出て來る所に、即ち大智大悲と云ふ所に眞面目が開展されて行くのではないか。それでその意味から云へが僧侶と云ふ出家と云ふ生活よりも在家の生活と云ふもの、方がこれからの佛教發展の道行ではないか、今まで職業的に僧侶と云ふものも残つて居るのでありますから、これを今ふちこはしてゆくと云ふことは到底いかんでありません。職業は職業として其の職業を存して置いて、さうして自然に在家佛教と云ふ所へ移つて來るのではないか、菩薩佛教と云ふ方面に移つて來るのではないか、これが又元へ引つくり返すようになるかも知れませんが、いまの所では、ゆき道は

やはり出家宗教と云ふよりも在家宗教の方へと進んで行つて、さうしてこれが社會的に實現する。社會と云ふのは先に申しましたように私は餘程廣く云ひたいと思ふのであります。人間だけの世界でなくして、草木も動物の世界をやはりこゝに入れると云ふことに考へたいと思ふのであります。さうでないと思ふと、人間だけがよくなつて、動物はどうでもよろしい植物はどうでもよろしいと思ふことではなからうと思ふ。佛教にはさういふものは悉く包み得る可能性があるのであります。基督教の方面で云ふと神がこの世界を人間に呉れたと云ふ風に、いまはいふか云はんか知らんがさう云ふ風に云ふた傾きがある、所が佛教はさう云ふことでなしに、天地と云ふものも我と云ふものもひとつであると云ふことの傾きが、これは佛教だけでない東洋思想の基調である。物と人を一緒にして居る、西洋では物と我とを一のものとは見ない、佛教は東洋では兎に角物我一體と云ふ、さういふ所から見ると、こゝに社會と云ふのはたゞ人間だけの社會を造

るのでなくして有情非情をひつくるめた大法界を建立して行かなければならない
ことに私はしたいと思ふ。

けふは大體これにして置きませう。(この項完)

—講演要旨文責在記者—

昭和三年三月十五日印刷
昭和三年三月二十日發行

不許複製製

神戸市熊内町五拾五番屋敷
編輯兼 佛敎相互文書傳道社
發行者 鬼勝長太郎
右代表者
印刷者 京都市壬生川通五條下ル 藤澤 淨 圓
印刷所 京都市壬生川通五條下ル 朋 舍

發行所
頒布所

神戸市熊内町二丁目
五拾五番屋敷
同 所

佛敎相互文書傳道社
眞宗相愛協會

電話 三六六六番
振替 大阪 六一八五三番

317
315

3

終

